

「楊貴妃、唐織本なり」

小田 幸子

室町後期の代表的な能伝書『八帖花伝書』

巻五(以下『八帖本』と略称する)に次のような記事がある。

一、女御・更衣、其外公家・上臈の御風情
信りたる能、出立の事。いかにも／＼気
高く美しく花やかに、いろがさねに念
を入、出立べし。まづ、上着ハ唐織を本
とせり。大内上臈なりとも、采女などハ
又位さがりたる宮女なり。必得べし。唐
織などは無用也。楊貴妃、取分唐織本な
り。大夫三十のうち苦しからず。年より
たるしてハこれを斟酌すべし。その子細
ハ、年よりぬれハ、つまはづれ、身入、
身なり、すがたかゝりまで、わかき時に
ちがひ、いやしき物なり。かたく斟酌尤
に候。付、若き大夫も、ころなどにはづ
れ、身なりあしき大夫ハ、この能を斟酌
尤に候。(早稲田大学図書館蔵、古活字
本甲類イ本。表記を若干改めた)

高貴な女性の扮装について述べるなかで、
「楊貴妃」上演にあたっての二つの条件、①唐

織を着用すること、②三十歳以前の役者が演
じること(同書巻七にも類似の意見がみえる)

を挙げているのだが、②の年齢条件のくだりに、現代の感性とのギャップを感じる人は少なくないだろう。若々しい肉体の持ち主でなければ楊貴妃の能は見られたものではない、年寄りな姿がみつともなくて下品だから遠慮すべきだ」などと現代の評論家が書いたら問題発言になるに違いない。現代は、役者の年齢や肉体的悪条件は技量で十分カバーできるという考えが支配的であり、見た目よりも芸力の方を断然重視する時代である。また、未熟な若手は演じるべきではないとされる作品はあっても、若手に限るといふ形の年齢制限はないだろう。『風姿花伝』の「女の能は若い役者にふさわしい」として仕立の大切さを説く〈物学条条々〉や、五十才以上の役者は「一般的には舞台上に立たないこと」(年来稽古条々)などから、室町時代の能(特に女能)が姿態美を重視していたことはよく知られていると思うが、それがどのようなものだった

のか実感するのは難しい。世阿弥は一方で役者の芸力を重視しているし、洗練された高度な所説は現代の能にそのまま当てはめても十分通用する面がある。それに対して『八帖本』の一見あからさまな発言は、感覚的であるだけに、現代との隔たりを強く実感させるのだと思う。このような規定が実際にどれだけ守られていたかはわからないし、〈楊貴妃〉に限る点も考慮しなければならぬとしても、役者の生理的肉体に支えられた「色香」を賞翫した室町後期の、ごく一般的な感性をまな形で伝えてくれる発言ではなからうか。

女性の姿態美と仕立の関連は、金春禪鳳の『毛端私珍抄』の女体の物まねの項にも詳しく、その中で「女御・更衣、泉式部・紫式部、又は式子内親王・李夫人・楊貴妃などのやうなる事は、一かど、其物のかたちと見ゆるやうに心ふべし。…ゑもんけたかく、やうきひ・りふじんもかやうにこそとおもはる、やうにいであつべし」と述べている点に注意を引く。高貴な美女の中でも美の化身の如くイメージされている楊貴妃が実際に舞台上の上にいるという実在感が大切であり、それは視覚上明らかでなければならぬとの前提に立って、仕立の重要性が説かれていたのである。『八帖本』の二つの条件も、そうしたリアリティを与えるための具体的方法とみてよ

いだらう。すなわち、役柄と役者の身体的対応(年齢条件)と、役柄と衣装の対応(唐織着用)とによって実在感を生み出そうとする方法である。

ただし、寛永く寛文頃に成立した『実鑑抄』に「五十歳以上は舞うべきでない」と記す例はあるものの、以後、年齢条件の方は姿を消してしまつたらしい。先述したように『八帖本』にしても、能の女性美の理想を体現したような作品だからこそ特筆したと考えられる。つまり、理念であつて、実状をそのまま反映しているとは限らない。

若手の所演が主として美の実感にかかわるのに対して、唐織は高貴さを実感させる方法であらう(中国人である点も関連しようか)。仕立は、男の役者が女に扮するための最大のポイントであるが、それだけではない。『八帖本』や禅鳳の説からも窺えるように、役柄の身分・階級にふさわしい仕立は、主人公の実在性を支えるための大きな柱なのである。そしてこの場合、唐織をめつたに着用せず、それを着て出てきただけで、はつとするとような高級感を与える効果があつたはずである。唐織の普及度について詳しくは調べていないが、采女などの階級にはふさわしくないとする『八帖本』や、禅鳳の『反故裏の書(一)』の「つかいの女房などは……おり物・からお

りなど似あわず」などを参照すると、本来用法はかなり限定的だったのだろう。しかし、このような注意をことさら記す裏に、唐織が女能に広くいきわたる兆しをみせていた事情も想定される。慶長期を過ぎる頃には三番目の女能(前シテも)や、余り身分の高くない物狂能の前シテにも用いるなど、現代の用法にかなり近づいている。リアリズムよりも美が優先したのだろう。(楊貴妃)について言えば、寛永期の型付にも「小袖、大つぼ折。いかにも結構ニ出立よし。ぬいはくなどへ何程けつかうにてもきぬ也」(『観世流仕舞付』)などもあるものの、唐織の特殊効果は事実上薄れてしまつていたのではあるまいか。

『八帖本』に記す(楊貴妃)の物まねの方法が有効性を持たなくなつた背景には能全体の表現様式や感性の大きな変質がある。おおづかみに言えば、視覚的リアリズムを通じて実在の人物を彷彿させるありかたから、見えるものを超えて発現する美や実在感に重きをおく方法への移行である。そして、あらたに考え出された(楊貴妃)の特殊性は、おそらく作物の宮に工夫を凝らすことだつたと思われるが、それについては別の機会に述べることにしたい。

(聖徳大学助教授)